

所 報

題字：武田満之校長（平成9年、野幌中学校）

第164号 令和4年1月28日

江別市教育研究所所報

江別市高砂町 24-6 TEL381-1058

（主な内容）

- ・「朝運動プログラム」普及出前授業実施報告
- ・第2回小学校外国語教育指導指導連絡協議会実施報告

「朝運動プログラム」普及出前授業実施報告

江別市では児童生徒の体力向上を図る目的で、北翔大学の協力を得て、遊びの要素を取り入れた運動「朝運動プログラム」を文京台小学校において実践してきました。その「朝運動プログラム」の成果を広く市内各小学校に普及させるため、平成25年度から毎年、市内各小学校で出前授業を輪番で実施してきました。

今年度は、前期2校（6月：大麻東小学校・江別第一小学校）、後期（11、12月：北光小学校・いずみ野小学校・江別太小学校）で、計画が立てられましたが、前期の実施時期に新型コロナウイルス感染の拡大に伴う緊急事態宣言が発せられ、この間の取組ができなくなり、5校すべてが後期実施となる変更を余儀なくされました。

後期実施となった出前授業は、11月24日（水）の北光小を皮切りに、12月2日（木）に第一小学校、12月8日（水）に江別太小学校、12月15日（水）に大麻東小学校と、4校で予定通り実施されましたが、最後に残っていた2月7日（月）のいずみ野小学校の出前授業だけは、感染症の再拡大から蔓延防止重点措置が適用され、残念ながらその後の日程確保が難しく、実施が見送られることとなってしまいました。



北光小での「流星☆彗飛んだ！」の様子



大麻東小での「キック&ダッシュ」の様子

全ての学校の取組の様子を終えてから、出前授業の様子をお伝えしようと思っていたため、報告が遅れましたが、「朝運動プログラム」では、遊びの要素を取り入れながら楽しく学ぶことをコンセプトに、各学校の要望に応えたメニューを、今年度も大宮先生に提供して頂きました。

学習内容は、ボールを投げる力と同時に走力を高める運動として、新聞紙にスズランテープをつけて、移動しながら投げる「流星☆彗飛んだ！」や、キック力と走力を高めるためにリレー形式で、キックルパットを繋いでいく「キ

ック&ダッシュ」、走力を高めるための運動として、ランニングに瞬発力を高める方向転換運動や、ジャンプを取り入れた「切り替えダッシュ」等の取組を紹介して頂きました。

そして、各校共通の取組として、授業の後半では、エアロビクスの日本代表選手として、国際大会に出場している是枝 亮選手に、「走力、跳躍力、投げる力」を、リズム体操を通して、自然とつけことができる実践を紹介して頂きました。



江別第一小での「切り替えダッシュ」の様子



江別小「リズム体操」の様子

今回、紹介して頂いた実践は、どんな運動機能を高めるための活動なのか、一つ一つの目的がしっかりと示されており、これからの指導における大きなヒントになっていたと思います。確かな運動能力の伸長につなげていくために、体育授業を中心とした教育活動に、これらの取組を継続的につなげていくことが大切だと、強く感じました。

文京台小学校以外の小学校における「朝運動プログラム」の取組は、単発的な出前授業としてこれまで9年間取り組んできました。今年の実施で、市内全ての小学

校における2回目の取組が終了（輪番による実践の最終年）し、来年度からは、体力向上に関する新しい試みをスタートさせていかなければならない段階に入っていきます。方向性としては、「継続的な取組による子どもたちの運動能力の変容」を見取る実践で、確認していくためには経年変化を追える実践となっていくと思います。北翔大学との連携を取ながら、新しい企画についての提案を、各校に図っていきたいと考えていますので、ご協力よろしくお願いいたします。

「第2回 小学校外国語教育指導連絡協議会の報告」

1月24日(月)に、今年度2回目の小学校外国語教育指導連絡協議会が予定されていましたが、新型コロナウイルスの変異種（オミクロン）の流行から、開催が中止となりました。リモートによるオンライン会議も検討しましたが、参加者が多く集約が難しいとの判断で、見送ることといたしました。協議会の中で、話し合われる予定であった「今年度の事業の反省」と、「次年度の事業計画について」は、事前に頂いた意見を基に、書面報告する形でまとめさせていただきました。

今回、大きな課題として、「学校間格差をなくす評価基準の工夫」、「学習効果を高めるノート指導の工夫」、「小中一貫を意識した教育課程の連携」等を中心に、次年度に向けた方向性を示させて頂きましたが、各校の協力を得ながら進めて参りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

＜活動の方向性について＞

- 大きな格差を生じさせないためには、評価回数（前後期の年2回）と形式（記述式、3観点による段階評価：将来的には段階評価へ切り替えが必要であり準備を進めていきたい）を揃えていく。
- 評価の基準を設けるためには、中学校入学時までに身に付けさせなければならない学習内容（単語数や基本文等）を、中学校の協力（教育課程編成委員会に依頼）を得る中で明確にさせていく。
- 中学校入学時までに「書くこと」に関して、どこまで求めるのか最終的なゴールを、市内で統一して示すことは必然であり、基準となるものを教育課程委員会で早急に作成していく方向で進めていく。
- 書く指導として、各校独自のワークシート等の活用が多くみられるため、方向性としては、市内で出来るだけ共有できるワークシートの作成に向け、單元ごとのワークシートを集約し、提示できる環境を整えていきたい。また、それらのシートをファイル等に整理させながら、学習の記録として残しながら定着化を図っていきたい。
- 外国語教育における小中連携の最大の目的は、教育課程の連結。小学校で身に付けた能力を土台にして、中学校で更に力を伸ばしていくことが学びの積み上げになるが、中学校入学時までに、定着が必要な学習内容を明確にさせていかなければならない。
- 中ギャップ解消や、効果的な学習につながる見通しのもてる授業展開等の共有化は、小中連携の目玉の取組となるため、学校間での授業交流や出前授業の積極的な実施を進めていきたい。